

病児保育施設における看護ケアの実際

山岡 葵、廣瀬 幸美、杉村 篤士、佐藤 朝美

横浜市立大学 医学部 看護学科

【目的】

子育てと仕事を両立するための保護者へのサービスとして病児保育がある。その中でも対象児童が「回復期に至らない場合」である病児対応型の施設では看護師によるケアの充足がより重要になると考える。そこで本研究では病児保育施設における看護師のケアの実際を明らかにし、病児保育における看護の専門性について検討した。

【方法】

2015年7月～10月に病児保育施設の看護師4名を対象に半構造化面接を行った。分析では録音したデータを逐語録化した後、意味内容を損なわないようコード化し、カテゴリー化を行った。本研究は、横浜市立大学の医学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】

分析の結果、5の【カテゴリー】と22の《サブカテゴリー》が抽出された。

病児保育の看護師は、《予約時に既往歴と現在の病状を確認》や《病状をアセスメントし保育中の注意点を保育士に伝える》といった【病状を見極め回復を促すケアの方向性を示す】ことや、《感染症の病状に応じた部屋割りの実施》などの【他児への感染拡大の防止】、《食事・アレルギーについて看護師が情報把握し職員間で共有》などの【事故予防のための情報管理と環境整備】、《子どもの病状や過去の利用時の様子に基づいたかかわり》などの【子どもが落ち着いて過ごせる環境づくり】を行っていた。看護の対象は子どもだけではなく、《子どもを預けて仕事に行かなければならない両親の葛藤を理解したかかわり》や《両親との信頼関係が未構築なことを配慮》といった【両親の負担を理解したかかわり】を行っていることが明らかとなった。

【考察】

病児保育の看護師は子どもの病状を多角的な視点から把握・アセスメントし、心身の回復を促す援助を保育士と協働のもと行っていた。さらに両親に対しても子どもの家庭での過ごし方について助言をするなど、病児保育施設内にとどまらない、継続した療養を援助していることが明らかとなった。病児保育はその特徴から様々な病状、年齢、発達段階の子どもが利用する場である。そのため看護師の専門性のもと予約時から保育中に至るまで、子どもの観察や両親からの情報を基に病状の程度を判断し、必要な看護・保育に結び付けていくことの重要性、さらに、両親への働きかけによって家庭でも子どもの回復が促されるよう援助していくことの重要性が示唆された。